

Title	地名の研究(柳田國男著, 古今書院發行)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.1 (1936. 5) ,p.162- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0162">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0162</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地名の研究 (柳田國男著)  
古今書院發行

少しでも學問的探究に興味を有する者であるならば、日常生活に最も多く參與するところの地名なるものに對して、何等かの注意を拂ふべきは必然である。「如何にして斯の如き地名が現はれたものであらうか」といふことは、一度は必らず志ある人々の自らに問うてみた疑問であらう。けれどもこの「如何にして」を解くべき鍵を持ち合せない悲しさに、遂に心に懸りながらもその詮索を放棄しなければならなかつた。我が國に從來地名研究の發達しなかつたのは、恐らく優れた指導的文獻の缺けてゐた爲でもあつたであらう。然るに最近吾々は、最も博識なる學者の多年研鑽の結果が、誰にでも手つ取り早く利用することの出来る形で、世に出されるの機會に巡り會つた。これは全く學界の慶事である。

本書は柳田國男先生が隨時發表せられた論考を、山口貞夫氏が編纂されたもので、本書の總論とも言ふべき「地名の話」「地名と地理」「地名と歴史」の三篇に於ては、地名研究の意義、方法並に地名發生の由來などにつき總括的に論述せられ、また各論とも見做すべき「地名考説」に於ては、地名發生の個々の場合、もしくは個々の地名について論究されてゐる。本書を繙くことによつて、人々は長い間己が腦裡に蟠つてゐた地名に關する不可解を、立どころに氷解せしめることが出来るであらう。または更に新たな發見への暗示を與へられるであらう。或はまた元來地名の問題などに全く無關心であつた人々でも、本書によつて最も價値ある學

問の對象が、直ぐ足許に横はつてゐることを發見するであらう。村の故老が記憶する村の歴史が、地名の研究によつて裏書されることもあらう。又はこれによつて更に新しい部分が附加されることもあるであらう。我が國全體の社會史とか經濟史とかいふ大きな問題も、その不明なる部分は一一般の文獻以外に材料を求めてこれを明らかにしなければならぬが、この場合地名の研究は閑却すべからざる材料ともなるのである。一つ一つの問題は小さいが、その小さな問題の解決が實は大きな問題を解決する方便となるべきは、この研究に心を寄するものゝ先づ第一に知らねばならぬところである。こゝに著者の言葉をそのまま引用することを許されたい。「諸君の先人等の辛苦計畫の名残は、斯ういふ一つ一つの地名の増加して來た跡からも之を窺ふことが出来る。小さいことだと輕視してはいけない。小さいことには相違ないが是に依らなければ片端でも昔の生活は知る途が無いのである。さうして農民の生活などは考へてみればどれも皆小さい。それを多數の志有る人々が、互ひに問ひ究めて背後の大いなるものを見つけ出さうとして居る所なのである」(一〇三頁)願はくは最近農民史乃至は村落生活の研究の盛となつた時期に當り、本書が多くの所謂「志有る人々」の「共同の知識」となり、また指針ともなつて、同じ態度を以て同じ研究に志す多數學徒の勢力の集積から、更に幾多の新たな結論の導かれんことを希望するものである。(有賀春雄)